

はじめに

本書、小児看護学②『小児看護技術』は、新しい時代に対応する看護基礎教育テキスト「ナースিং・グラフィカ」の小児看護学のテキストとして2007年に初版を刊行し、このたび、第6版を刊行することになりました。

本書では、子どもを発達していく存在であり、年齢や健康レベルにかかわらず、権利を有し行使することができる主体であると考えられています。子どもは、成長・発達する過程で自らの健康を理解し、学習を通して健康を管理する力を身に付けていきます。子どもと家族を看護の対象として位置付け、家族と看護者がパートナーシップを形成し、子どもにとっての最善のケアを提供することが重要であると考えています。一人ひとりの子どもの権利を擁護し、子どもに安全で安楽なケアを提供していくには、科学的根拠に裏付けされた、看護実践能力を習得する必要があります。

小児医療の場では、小児医療の高度化・多様化に伴い、広範囲に及ぶ専門的な看護技術を、子どもの発達段階や、子どもや家族の状況に応じて駆使する看護実践能力が求められています。一方、少子化が進み、小児医療体制が見直され、病院の小児科の集約化が行われています。小児病棟は混合病棟へ変更され、小児科を標榜するクリニックなどは減少し、小児看護実習を通じて見学・実施できる小児看護技術には限界があります。また、侵襲的な技術については、看護師の資格を有していない学生は、倫理的に実施することはできません。このような現状の中で、小児医療の場で求められている看護実践能力との間には、大きなギャップが生じていると言っても過言ではありません。看護基礎教育において、小児看護技術をいかに教育していくか、さらに対象に応じて小児看護技術を創造していく看護実践能力をいかに教育していくかが課題となっています。

2018（平成30）年に日本看護系大学協議会から「看護学士課程教育におけるコアコンピテンシーと卒業時到達目標」が示されました。文部科学省からは、「看護学教育モデル・コア・カリキュラム（令和6年度改訂版）」が出されました。また、「看護師国家試験出題基準（令和5年版）」では、子どもと家族の支援について、発達段階や課題を主眼として問うことができるように、中項目・小項目の体系が整理されています。本書は、これらに対応できる内容となっています。

第6版では、新たに巻頭に図解①「子どもの発達の目安」、図解②「基本的生活習慣獲得の目安」を設けています。子どもと関わる機会が少ない方々にも理解しやすいように、子どもの年齢に応じた発達の目安、基本的生活習慣を獲得する目安を一覧表で示しています。また、新たに「子どものセルフケア能力を高める視点」と「親の子どものセルフケア能力を補完する能力を高める視点」を各章頭に設け、「プレパレーションの視点」を各技術の実施の前に提示しています。子どもの成長・発達を考慮し、子どもと親

のもつ力を見極めながら支援すること、小児看護技術を通して子どもの権利を擁護することを考え実践する際に、活用していただくことを目指しています。

まず1章では、「援助関係を形成する技術」を取り上げました。続く2章から11章では、「健康状態を把握するための技術」「安心・安全な環境を調整する技術」「食事の援助技術」「排泄の援助技術」「清潔・衣生活の援助技術」「安全・安楽を確保する技術」「与薬の技術」「呼吸・循環を整える技術」「症状・生体機能の管理技術」「救急救命の技術」を取り上げ、看護の基本技術として、日常的に用いられる看護技術から救急救命の看護技術へと組み立てています。

これらの看護の基本技術に必要な根拠となる事柄を、基礎知識として提示しました。全体を通して「子どもの権利擁護」「子どもの発達」を重視した小児看護技術を示すことができるように、手順とアドバイスの中で具体的に示すとともに、看護倫理の視点も踏まえて重要なポイントを記載しています。

初めて小児看護学を学ぶ学生が、一人の人として子どもを理解し、子どもの権利を尊重しながら援助関係を形成できることを目的とし、さらに根拠に基づく看護を子どもの発達段階や健康問題に応じて、倫理的配慮を行いながら安全・安楽に実施する上で役立つように、写真やイラストを増やして、理解しやすい構成としました。主体的な学びの支援として、QRコードを読み取って閲覧・視聴できる最新のデータ、詳細な解説、動画などを収載しています。そのほか、コラムでは、小児医療の最前線で活躍している小児看護専門看護師や熟練看護師の看護実践などを紹介しています。

小児看護実践能力を育成する基本的技術を習得する上で、学内での小児看護演習や、小児看護学実習でテキストとして、本書を活用していただきたく思います。また、実践の場でご活躍の看護者の方々が、一人ひとりの子どもに応じた小児看護技術を創造される際にも、活用していただければと考えています。本企画の意図が皆様に十分理解され、広く活用していただければ幸いです。

最後になりましたが、執筆者の方々、本書の企画から刊行までご尽力くださいました皆さまに心から感謝いたします。

中野 綾美
高谷 恭子